

これらはすべて、もとの本がありさえすれば、考えらる必要もない自明のことからしれぬ。然而て「中外交地攷謬」の前言に「書以前之西域及南蕃地理書」は原書がほとんどすでに消失し、「」の一篇はその遺団を保存するために書いたのだといふ。李長吉註『海外紀』は薛驥が楚辭の注を書いた清の康熙の代にかけてその後の二百年間に滅んだのだろうか。あるいは丁將氏は他の書に引くものを使に引用したのだろうか。

4 李賀評楚辭 「雜記」3の『李長吉註海外紀』は楚辭の「天問」にかかわりがあった。そこで思い起すのは、李賀の離騒と天問に対する評語である。故小林太市郎博士の原田憲雄（昭和三十一年七月三十日付書簡）原田憲雄編「小林太市郎博士書簡」（[http://www.yukawa.org/nihon/](#)）に、

へなあ、李賀について御承知と存じますが、隨筆の「金壺記」卷下に「李賀、字長吉、其手筆精捷」という語があります。また先日の「楚辭集注」に收めた李賀の評は、離騒について「感慨沈痛、讀之有不欷歔欷泣者、其爲人臣可知矣」、天問について「天問語、崑崙嶠、子楚辭中可推第一、即開闢來亦可推第一、賀極意好之、時居南園詩數過、忽得文意何處哭秋風之句」その他になつています。右既づきましたまほく。

文中の『金壺記』は末の釋文が轉めた三巻本で昭和十四年に東京の静嘉堂文庫が宋刊本を影印したものが『静嘉堂祕笈』に收められてゐる。そこには「手筆精捷」は『曰唐書』の李賀伝の「手筆敏捷」と極似するけれども一字と異にする（「」）、『金壺記』の珍書なること、によつて教示されたのだろう。

離騒評は「感慨沈痛。これを読んですり泣き、涙を流しもせめがあれば、そういう連中の人臣としてのありかたなんぞ知れたものだ」天問評は「天問の語は、はなはだ奇峭である。楚辞中でも第一に推すべきもの、といえはつまりは聞聞以来の第一に推すべきものといえよう。わたしは極めてこれを好む。ちかごろ（昌谷に帰つて）南園で幾たびか読みかえていて、ふと文言句外笑秋風の句を得た」というほどの意であろう。

そのうち博士を訪ねたとき、この評のはいつている『楚辭集注』を見せてもらった。だのにその日の博士の話はたいへん興が深く、ノートをとり出して版本の年次や刊者の名をひかえろいとは、なかつた。また次に、といつ氣もあつた。ところが博士はすもなく逝去され、藏書の大部分は国立京都博物館と神戸大学文学部に歸し、小部分は董族の方が処理された。神戸大学にはいつたものの中から楚辭關係のものを算りてしらべたが、みつからなかつた。

秦亮夫編著『楚辭叢注五種』一九六九年華文書局の五の頁に、明天啓六年丙寅稿李忠雅堂蔵之楚辭解評校本『楚辭集注』が著録され、そこに收める七十二家の評については三二一頁「七十二家評楚辭」の項に氏名をかかげ、李賀の名も見える。小林博士の祭載の本もまた、たぶんこれであつた。博士から李賀の天問評を示されたとき、蕭蕭として秋風おこり、響屈の中から突然として解き放たれる李賀の魂の声を聞く思いがした。だが同時に、この語には李賀その人よりは、李賀に打ちこんで李賀自身よりも李賀の心情の構造の機微をさとつた人が、李賀のために言つてやつているというような感じがした。明人のなかにはときどき「いう人がいる。いや、明人にかぎらな

い、中國の読書人の中には、みずからは詩も文ものこさず、人の詩文を読めばただちにその作者のエートス、バトス、ロゴスの本質を的確に把握し、しかもそれを直接的な批評文として示すことは好きず、作者よりも「そつ作者的な文体で短い文章をつくり、それに作者の名を冠せておくよな心憎い曲者」がいる。現代人はそれを偽作といってそこにスキヤンダルしか見ないであろう。あるいはまた自ら創作しえぬ者のコンプレックスしか見出さうとしないであろう。だが、そういう現代人の自己顯示欲は、個性を標榜しながら一様にうすぎたないひいひいやううまんりぶの男女どものそれほど異なるのか。

「李賀の楚辞評」は恐らくそのような讀書人の獨特の「李賀評」なのであろう。小林博士は、一二の形で批評を書く中國の讀書人にはにかみと矜持、瀟洒といったずらを、深く理解し愛する人だつた。だから何の解説も費さず、李賀の楚辞評を示されたのであろう。(辛亥二月二十日) 5 阿雲 長吉臨終のことである。ふと日中だのに、ひとりの緋色の服を着た人が赤い蝶アゲハに乗り太古の篆字か雲霧石文のよう左書体でかかれた一枚の板をもってあらわれ「長吉を召すべし」という。長吉にはち、とも読めない。一、とベッドから下り、おじぎをして、「母さんは年寄りだし病氣です。わたしは行きたくありません」紺衣の人が笑つて、「天帝さまが白玉棟をあつくりなさつて、すぐ君をよんて記錄の文を作らせよとおっしゃる。天上にはまあ樂しいところでねいやがることはないや」長吉はただ泣くばかりだつた。……李商隱の「李賀小伝」の有名な一節である。この小伝は實に立派な文章だと、読むたびに感心する。わたしが雑誌『方向』で李賀

について書いた文章に「白玉楚中の人」と題したのは、いうまでもなく小伝にちなんだので、以後に書くものも含めその總類とするつもりだった。小伝の中でもこの部分が生き生きとしていて、「ことば賀が『母さん』といふことは、むしろ、なまなましい。「母さん」と訳すより「かあちゃん」というほうがいいのではないかと思うほどなまなましい。その原文は「阿婆」。婆は本によつては彌とも極ともするが、もともと擬声語だらうから、音さえ合えばかまわないのだろう。清の鴻浩はこの語の注に「東注。長吉がことばを学び始めたとき、母を呼んでこういひた」としるす。この東注というものは『唐文粹』の注をさすらしい。『唐文粹』はめったに注をつけないので、だから、たまたまはいつているものは、その極めた集にあつたもので、この場合は李商隱の自注とも考えうる。かれの小伝は李賀の姉のことばによつたと自らいっている。事柄の内容のみではなく、言い方まで、出来るだけ姉のそれを生かそつと効め、それに成功したのが、この文章の生き生きしているゆえんだ、とわたしは信じる。この東注もまた、本文に書きこむとわざわざいが、翼を理解するためにには少くせぬと判断した。賀の姉の何氣ない言葉の端を、商隱が注として保有したのではないか。

鴻浩はやきの注に続けて「古韻には『顎、音は反切法で示せば武移の切、齊の人が母を呼ぶことば』へといつている」と記す。『古韻』にはたしかにやの通りかいてあって、武移の切は『廣韻音義』の表音法によれば「アミ」である。ところで問題は他本の文字が同じ音であるかどうかである。彌は同音である。どこのが『田部書刊』に收める旧鈔本『李義山文集』では、「称」とし

『高文粹』では「稱」とする。称・稱ともに稱の略字で、稱は *tʂiang* 輕重を取る、*tsuei* 重。輕重を取る、*tsuei* 重。
にかなう、であつて、母親の呼称に使われたようではなし。これにあるいは「嬌」の書きあやめりではないか。『広韻』上声、十一蕭の「稱」の頭のその字の後に嬌字が出ていて「姓の人人が女
を呼ぶ」ときに使つことせ」と解説する。蕭 *tsuei* 『五韻声系』の注によれば、『広韻』のこゝ
「楚の人」を『五韻』では「夷人」とする。116字にはもう一つ音がある。*mai* であつて「乳」
といふ意味で、「い」とき、「妹」とも表記されるという。一一一でわたらしが思ひ合ひせて興ふかく感
するのは、清の阮元らが纂輯した『廣東通志』卷九十二に『粵東筆記』をひいて「広州で、母の
ことを嬌」とい、また媽媽ともいふのは、母の発音の転化したもので、すなわち母なのだ」とい
つてあることである。

齊は古代に周と対立し、周人からは東夷とよばれた。齊の地、た山東地方に周の勢力が拡張するに、齊の言語、文化は南下して大江流域の楚の言語文化と混交し、それがさらに南下して広州に及んだ道すじで類・彌・鳩などの分化・転化が生じたのではないか。わたしは、中国方言学について、ほとんど全く無知である。だからわたしのこうした思いつきは専門家の教えで、いつでも訂正する。

ただ、わたしは古の出来たことを語っていたのは、それが季節の風景に一時の光がさしかかってくればしないか、と酒うからである。

これまでのわたしたちの知見からすると李賀の詩に山東の地名・風物のあらわれることは少く、

吳・楚・嶺南のものは圧倒的に多い。(唐代には大江の中流の湖沼地帯とその周辺を楚といい、下流一帶を吳といい越といつたようだが、古代の楚が尋・越の地にまで勢力をばしていったこと、大江という交通路によつて貿易が発展したことなどによつてその言語文化はかなり密接したらしい)このことと、賀の幼年時代の言語に吳・楚あるいは嶺南の方言がみられることに觸りがありはせぬか。わたしはさきに拙稿「馮小憐」で、賀の恋人は吳の出身の沈氏ださうと推測した。また「楊柳」で、かれの四世の祖の李孝逸が吳楚・嶺南とばかりがふかいことを指摘した。これから先は想像だが、あるいは李孝逸は流された海南島で、その地があるいは広州の豪族の女をめどり、その間に生れたのが賀の曾祖父ではないか。もつともそこまで飛躍させなくとも、李孝逸が流されたとき、家族もいっしょに流されたか、あるいは分散して吳楚の地に流されたとも考えうる。そして賀の父の晉肅あたりまでは吳楚に住み、晉肅が扶県の令となつたのをしおに、祖先にゆかりの洛陽に近い蜀谷に家を設けてほんだのではないか。それならば、外では長安・洛陽のことばを使つても、内では吳楚のあるいは嶺南のことばがまじり、幼時にしめついたことばのゆろみ体のあとろえたときには思わず洩れ出るものだから、それが駿終のことばに流露したのかもしれぬ。

さきにひいた『広東通志』は同じ巻に「難(廣東高要県)の人は自称に儂といつ、吳のことばと近い」^{脚註}「粵方言ではきれい(美しい)なことを瀟」という。広州ではすべて池や沼のことはみな塘といつ、「粵方言などとこづ。眞の「十三四漢語 十三四」20679(校本035)の「日脚淡光紅灑灑」の

無事、出立した。懸念の懶かも早くな。却せ「錢塘蘇小小」^{レタ}20653(校本009)「梅溪山樟樹」^{レタ}20652(校本013)「朱砂碧螺春」^{レタ}20663(校本019)などは圓極の器だが、「赤壁頃燒器」^{レタ}20647(校本003)「赤壁頃燒器」^{レタ}20641(027)「鷺鷺茶」^{レタ}20735(校本091)「梅熟石竹酒」^{レタ}20794(校本150)「梅熟石竹酒」^{レタ}20797(校本153)「鷺鷺茶」^{レタ}2048(校本204)の樂にみたる只の懶であり、懶の懶に匪しなむ。「風雨中櫻蘭桂田」^{レタ}20877(233)の如きである。

『心臓癆病』6巻九十四、五、水には物語を列挙する。ソノニ「薔薇(観林)、紅蘭花、三葉脂、木製花(御室の所種か)、白花藤、迦陵、白蘭、田紫松(田紫松)、琥珀、桂、眞珠(眞珠)、沈香……」^{レタ}20877(233)中篇集に親しむものには田舎のものによくに感ぜられるものであつてが、杭州以外には無くなるところではなし。しかしこれの物語は中華の如が頻りに取り上げられるところに賀の詩の奇異な昔せいがかられるこゝに確かたのだ。その奇異からただちにエグゾティシズムの由由を出し、李賀の浮華を糾弾したり、第一ロッパの世紀末藝術と統びつけでその異國趣味を譲渡する向もしないではない。だが、かれの経験の廿二年ほどの間此が結びついているならば、かれの奇異はかれの生存の本土に根柢をもつものであつて、歐國趣味のように外へのもののがれとはちが、だらだ。長安・洛陽のみを文化の中心と考える中華民族の崇める官僚社会、神話を合理主義で圧殺したてまえや、そのこしておけば現実がんばる必しの想、でもたてまえに安住して正統と一流の旗を立てておれる正人君子たちにと

つては李賀の詩術は狂いざまの花、異國趣味、牛鬼蛇神、妙、……でもあろう。正人君子たちは天を祭壇において時々祭り、あとは忘れてはいる。天は正人君子が民衆をおどしつける鬼面であつて、正人君子みながらの日々の思考感情の根柢とはほとんどかかわりがない。そういう社会に、本氣で天を信じ、それゆえに正人君子の敬して遠ざけ祭壇に閉じこめて忘れてはいる天を攻撃する人間が出てくれば、うろさく、わざわざいにさまっている。異端邪説、そこへ分類しておけば、紳士・良民は近づかない。

「李賀小伝」に李商隱が心をこめて書きとどめた賀の母をよぶ書が「阿婆」であつたか「阿嬢」であつたかは、瑠璃のせんたくに見えるかもしれないが、實にかれの生の根柢にかかる。いまのわたしにはいすれと断定する知識がない。わたしは初戀をさほど重んじる者ではないが、こいつ大切なことを判断するに必要な知識の欠けることに、身を切られるようなくやしさを覺える。

(昭和辛亥二月二十三日)

6 畿下馬 李賀の「馬詩」の八首目に「赤兔無人用 唐源昌布騎 吾原県下馬 藝娘任畫兒」
2073(校本069)がある。これをわたしは『娘我集』^{ハナタマ}で次のように訟している「赤兔あはれ人は用
みず 頭布の来て騎るをまづべし 聞くならば 畿下の馬 善兜^{カサハ}だに手綱しつべし」昌市は後漢末
のすぐれた武将。赤兎は愛馬で、城壁を飛びこえ、壕を飛びこえたので「人の中では昌市どの、
馬ならば赤兎こそ」とうたはせられた。そこでこの詩の初、二句は、あまりすぐれた才能にはほ
ゞすぐれた人でなければ使いこなせないため不器であることが多い、というほどの意。畿下馬は

馬十三尺ほどの馬で乗つたまま果樹の下が通れるというのでその名がある。三四句は、小オのչ
くでいどものは使いやすいのかえって人に愛用される、といふほどの意にしたのがわたくしの訳。旧注新注みなほほ同じとり方をしているようだ。ところが、ちかごろになつて、この三四句をもう少し違つた観点からながめるようになつた。まだ断定するところまではゆかぬが、その考え方だけ記しておく。

さきの訳では、累下馬は、赤兎とは対極的な卑小のものとどっている。従つて、靈兒もまた、呂布に対して卑小のものとする。それを、いまはただ種類の違つたものとして見よとするのだ。その一つの根柢は明の遺臣岳大均の『薦東新語』方有書店卷二十一「累下馬」の条である。「羅定の羅鏡、西寧の懷鄉では小馬を産する。高さはわずか三尺、のつたままで樹下を遍る」ことができ、累下馬といつ。黒駒ともいい海石駒(ばき)色のものが多い。すぐれたものは背骨が二重になつていて、重い荷をつけて高山をこえ険路をわたり飛ぶように走る。……累下馬は小さくてかつちりしているので石馬ともいう。云東の人は小さなものをなんでも石といつのだ。しかし累下馬は、そういう種類があるのでなく、馬の中から偶然に産するので、いつでも手に入れうるものではない。だからその値段はべらぼうに高い」「

累下馬については『三国志』魏書卷三十漢伝に「漢は南は辰韓と、北は高句麗、沃沮と接し、東は大海にきわむり、いまの朝鮮の東部はみなその地である。……また累下馬を産し、漢の桓帝の時これを献上してきた」といふ。張松の注に「累下馬は高さ三尺、これに乗つて果樹の下を駆け

るので、これを累下といふ。博物志・魏都賦に見える」という。『太平御覧』に引く『博物志』の記事は魏書とほとんど同文（つまり總書の記事は『博物志』に挿ったのだろう）『文選』の魏都賦には累下と一文字は見えるが累下馬とはかわらない。宋の元成大の『桂海虞衡志』^{(註)桂海虞衡志}に「累下馬はこの地（海南）に産する小さな馬である。徳慶の灘水から出るのが累上だ。高さは三尺をこえず、すぐれたものけ背骨が二重になっているので、また双脊馬ともいう。丈夫でよく歩く」さきの王氏の文も、これらの古記述を織り合わせそこへ自分の知見を加えたものらしい。これらのどの記事をとっても、累下馬を小さな馬とはいっても車しいものとはいっていい。滅國が漢に獻じたのはそれが価値高いものだったからであろう。王注は累下馬をさて「つまらぬ乗りもの」（下乗）というが、はたしてどうか。童兒もまた、馬のりこなす技術からいえば恐らく軽んすることはできないので、李賀が「葉家洞」^{(註)葉家洞}で「のんびり竹馬」^{(註)竹馬}をはしらせけたたりと家に帰る「閑駆竹馬緩帰家・どうたうのも、山谷をかけめぐる竹馬と名づける特殊な馬を自由自在に乗りこなす」というほどの一處であろう。さらに童兒の兒の字が子供をさすだけかぎらず、童入を畜児といつたのではないか。では例の三四句はどう解くか。

形が小さいから可愛らしいなどって累下馬を宮中にもちこひつもりなら、やめるがいい。小さくてでも宮人の手には貰えまい。また累下馬は山林に住む人々の中にあってこそ有用で馬にとっても幸いだらうが、宮中ではただの玩弄物で馬にしめいわく。單べ體毛のものにはすかい。累下馬は畜児のもので、と広州のことわざにもあるではないか。——わたしはこう解したい。そ

れなうは、さきの拙訳は「聞くならへ 果下の馬は、
ばよかろうか。なお、蛇足ながら、果下馬は漢國（朝鮮）にも産するけれども、ここでは數うそれ
は、蛮兒の語からして嶺南産をさすことが明らかで、蛮兒の語もまた「キミたちがよく名りものは
めぐせにいやしめて」いうその“蛮兒”「とてもいうべき反語諷諭としての蛮兒であるように感せ
られる。

7 沈繁翁注昌谷詩

清の馮浩の『芙蓉文集箋註』上治文集稿石印卷八「李賀小伝」の注に「う「近」

スの人で吳江の沈繁翁といふ人が昌谷（李賀）の詩に注を下さる、こうしている。この篇（高軒馮）
はちょうど父の誣を犯すことと避け進士の試験をうけなかつた時に作ったもので賀の年は十九だ
ったはず」近人吳江沈繁翁注昌谷詩而謂此篇正齋遺稿名不敢舉進士之時賀年二十有九。馮浩は一七
一九年から一八〇一にかけての人だから、沈繁翁もそのころの人である。王琦の生卒年はわからぬ
が『李長吉歌詩彙解』の序は乾隆二十五年（一七六〇）。冬至後廿日付があるから、やはりほぼ同時の
人なのであろう。実証的な學風の興隆して来た時代で、文学研究も綿密になり、詩文の実作でも
さめこまかなるものがあらわれる。李賀の愛読者もすいぶん多くなり、注釈を試みる人が輩出する。
創刊号の雜記2に紹介した史雪汀、それからこの沈繁翁、それらの一人なのだ。沈氏の箋註がど
んな規模内容のものが知らぬが、馮浩が引く一条から察して、相當質の詩を熟読したようにつか
せられる。ほかにも全く一字ものこじめ愛読者があまたいて、李賀の詩を支えてきたのだ。それ
はそれで驚いが、文字にな、たものは一行でも保存しておきたい、

（辛亥二月二十八日）

評注家譜里 王注の首巻に「評注諸家姓氏爵里考」がある。李賀の詩の批評・注釈を書いた人の氏名と、社会的地位と、出身地のメモである。王注以後の注家も加えてながめてみると、ある傾向のようなものがうかがえる。一、官界に入らない人がかなりいる。二、官吏になつても権力者と合わなかつた人、あるいは革命的な気分の人が多い(このことは芥井注がすでに指摘する)三、吳・越・楚・嶺南の人が多い。

劉辰翁(一二九四—一二九七)は廬陵(江西)の人で、太学生となり廷試に及第したが時の権力者の賣似道にさからい、以後は民間の学者で通つたらしい。是の人といつてよいであろう。徐渭(一五〇一—一五九三)は山陰(浙江)の人、すなわち越の人で、官吏としてはうだつの上らない、しかし书画詩文に秀で狂氣をふくむ人として有名だ。曾益もその前後の、やはり山陰の人。余光は明末の進士で莆田(福建)の人だから福建の人。おじーの姚佺は秀水(浙江)の人だから吳越の間といつことにならう。姚文慶は桐城(安徽)の人。黃淳耀(一六〇五—一六四三)は嘉定(江蘇)の人。蔣楚珍は金壇(江蘇)の、陳二如・錢飲光は桐城の、周玉鳴は蘇州(江蘇)の人であり、王時は浙江省錢塘の人。黎簡(一七〇一—一七五九)は広東省順徳の人、吳汝綸(一八〇〇—一八五〇)は桐城の人である。これらのうち吳汝綸が李鴻章の幕下で活躍した高官だつたらしいが、それも後に病と称して隱居したようだから平靜の内面に一息の熱火を保持した人だつたのだろうか。

いずれにしても、北方の人より南方の人には李賀を嗜読する人の多いことは、かれの詩の内包するものと聞わりがあるよう思えてならぬ。

(辛亥二月二十八日)

9 「柳毅伝」李簡の「幽公」2075(昭和107)の第七十八句は「葦蓬瀛馬鬪」これを清の姚文慶の『昌谷集注』すなわち姚注は、一、二解く「柳毅伝に、龍の子が銀瓶の水を馬のたてがみに注ぐとすぐ雨がふる、といふ。そこで一、二の句は、別れたのち櫻に上ってながめると、雨のふるようになら」とどめがたいことを、いふのだ」「そういわれても、いつこうすつきり呑みこめないが、「柳毅伝」さえ読めばわかるだろうと、それを読む。ところが「柳毅伝」には姚注の引く文は見えない。これは本がよくなきのかと、がす。あるいは類書のたぐいに引かれたものかと、くつてみる。やはりみえぬ。斎藤注も同じ苦労をなめたのか、「現在の柳毅伝にこの文句は無い」と記す。ところが近江の出た陳釈は姚注を引いたままで済ませている。かたしげ幸い、「続玄怪錄」にのせる「李靖伝」がその典拠であろうことを突きとめ拙補「幽公」「に私解をのべた。ところで問題は姚氏が「李靖伝」を読んでいたかどうか、ということである。どうもさうではなさそうである。もし読んでいたら、わたしの解に近いか、あるいは同じ解釈が出るはずだが、姚氏の解は、全く方向からして違う。姚氏の解は姚注にいく、「柳毅伝」の文章の一行を材料にして勘測を加えたもので、しるにすぎない。けれどもあの一行は、「柳毅伝」の文章ではなく、「李靖伝」を要約したもので、しかも要約の過程で誤りを含んでいる。姚氏は、たぶん他の人が誤つて要約したその文章を信じ、そこに腰をすえて立論しているのだ。「李靖伝」と「柳毅伝」とを取りちがえるとはいどすぎる。しかしその誤りは、実は起りやすい原因をもっていた。この話は、どちらも龍神にちなんだ話だ。そこで宋代の類書『太平廣記』はこれを龍類におさめた。たまたま「李靖伝」は巻四百十八の最

後にあれ、「柳毅伝」は巻四百十九の最初におかれている。巻は違つても連続しているのだ。二つの話の混同はきわめておりやすい。どちらもかなり長い文書だから、全部を引用することは事典的性格をもつ本ならばむつかしく、勢い要約することになる。事典でなくとも、中國人が引用する場合、地の文に合わせて引用文を変形することはあたりまえのこととされている。要約や引用がたび重なれば原文とはかなり違つたものとなる。姚注に引かれたものは、その姿のかわらてしまつた「李靖伝」なのだろう。それでは李靖の句がとけるはずがない。しかし姚氏は自己解を執つて旧注を曇らう。わたしの仕事にも姚氏のようでは過誤がまぎれこまめといふ保証はない。わたしの弟の栗田禹雄は医師だが、実験や診療の上の失敗を丹念に記録するという。同じ失敗を人々が繰り返さなくともいいようにそうするのだという。人文科学の研究では過誤の記録をつみかさねる努力がされてゐるのだろうか、論争も避けるのが碧子という風らしいな、と、これは学会というものにはほとんどながりを持たぬわたしとしては、堅はずみなことをいうと、その方のことは知らんが、近ごろでは医者の中にも成功の記録は発表するが失敗の記録を抹殺するような傾向も無いわけではない、ついでいことだな、と答えた。わたしは弟のその言葉にはげまされ、失敗と過誤の記録をも明らかに二二にとどめておこうと思う。

(辛亥二月二十八日)

10 「三農告」付記『日知録』を読んでいたら、巻九「知縣」の条に知県と県令とは違うのだ、といふことを、くわしく説明している。県令は正式の県の長官だが、知県は県令が欠けたときには代理する下級官だというのである。その一例として、唐の姚合が武功の尉となつたとき作つた、

「今朝知県印、夢裡百憂生」の句が引いてある。無可乙が長吉Cに贈った詩中の「解題」の語も県令でなく知県だつたかもしだれぬ。それならば当時の長吉Cは二十代だつたかもしだれず、長吉A・Cの年齢はさうに近づくかもしだれぬ。それでもやつぱり長吉AとCとは別人だつたとわたしには感ぜられ、その根拠は「三長吉」中にあげたものでほぼ足りるようだと思ふ。(二月二十八日)

創刊号・第二号 正誤

創刊号 五頁 39 (16行) 「文史譜著」は「文史論著」と訂正。一八頁 3行 新唐 もとの論文にこう書いているが新唐書の誤り。二六頁 8行 まとまりとして「まとまり」として「まとまり」と訂正。三〇頁 6行 もはそーは「もはやそーは」と訂正。三四頁 11行 方程 「方程式」と訂正。四〇頁 12行 説識論 「説識論的」と訂正。四二頁 17行 位置された 「位置におかれた」と訂正。四六頁 7行 予見す 「予覗する」と訂正。

第二号 一四(64)頁 1-5行 長吉A・B 「長吉A・C」と訂正。二六(76)頁 10行 はなた宇宙 「はなれた宇宙」と訂正。三一(81)頁 8行 一の空事の新 印刷が不鮮明だが「一の空事の群」である。四〇(90)頁 1行 略字 「俗字」と訂正。
(
寄贈

草森紳一氏「垂翹の客 李長吉伝第二部」(『現代詩手帖』 1-2-3-4-5-6-7-8-10-11-12)

×『李賀研究』第一一號を先師本末曉田曉上人の生日(一八八八年三月六日)に捧げる。